



良子さんの ほっと一息ティータイム

木犀の香り立つ宵

熊谷良子 vol.18



今年の金木犀は、咲く時期が遅くなっただけ。夏の暑さが金木犀の季節になっても譲ってくれなかったからだという。ラジオの気象予報士の声を聴きながら目覚める。

東京に住む娘から「外では金木犀がすごくいい香り」とメールに写真が添えられていた。

「家のまわりにたくさん金木犀があるから、行き帰りは幸せな気持ちになるよ」とのことだ。

東京は急速に開発が進んでいる大都会ですが、大通りから一つ奥まったところには、昔ながらの路地や家屋が残っていて、そうした所で、木犀が香り、銀杏が色づいているのでしょう。

私の東京旅行の楽しみは、この路地歩きです。「東海道中膝栗毛」の弥次さん、喜多さんはお伊勢参りへ東海道を、「奥の細道」の松尾芭蕉は奥州、北陸道を、自分の足を頼みとして歩きました。憧れの旅スタイルですが、実際の私は「早・楽・安」を検索して選んでいます。

そういえば、秋を感じ始めた宵闇迫るころに近所を歩くと、木犀の香りが漂ってくる曲がり角がありましたが、最近は、道路の整備や家の新築、改築等によって、すっかり景色が変わってしまいました。木犀もどこかに移されたのかもしれない。

こうして、私の木犀の香り立つ宵は、思い出として語ることになりました。

木犀をみごもるまでに深く吸う 文挾 夫佐恵

旅先では、「この景色は一生胸に焼き付けておこう」などと感動しますが、この俳句には圧倒されます。

この香り、この景色、この出会いは、まさに一期一会です。

